

沼津市若山牧水記念館

第40号

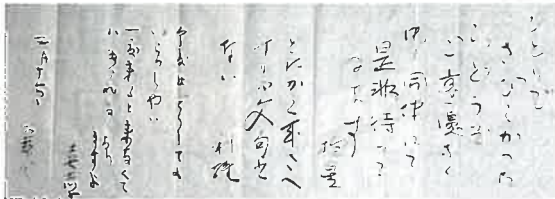
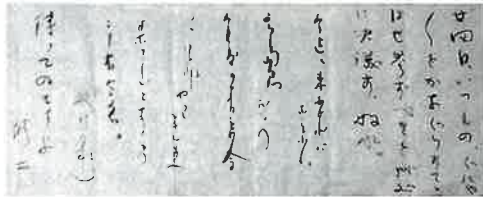
2008. 3. 25

編集・発行
〒410-0849

社団法人 沼津牧水会
沼津市千本郷林1907-11

TEL・FAX 055-962-0424
http://web.thn.jp/bokusui/

高島友次郎宛書簡



廿四日、いつもの、ぐにや
くをかなぐりすて、
はせ参すべきを此処
に決議す
今迄に來なければならぬ
高島君だもの
今度の青葉会
には是非やつて來たまへ
集まらむとするもの
二十有余名。
汀峯
待つてゐますよ
修二

ひとりで
さびしかつたら
どうぞご遠慮なく
御同伴にて是非待
つてゐます 抱星
とにかく来さへす
りや文句はない
利雄

一度來ると來なく
てハゐられなくな
りますよ 喜志子
五月十六日 大勢で

高島友次郎は、明治三十二年田方郡西浦村（現沼津市西浦）古宇の農家の三男として生まれた。「創作」に作品が発表された最初は大正八年三月号で、数えて二十一歳の時となるうか。当時の文学青年にならつて、雅号を富峰と名乗つていた。古宇からは真つ正面に海越しの富士が望め、そこからの命名だつたのだろう。兄二人が幼くして亡くなり、家を継いで農漁業に勤しむ境遇にいた。中央の新聞や雑誌に投稿し、選者の牧水に誘われて、大正六年に復刊した第三期の「創作」に入会した。

その牧水が、大正九年に沼津在の上香貫折坂に住居を構えた。友次郎にとつては、より身近な存在として牧水への親しみを増したのである。大正十二年には雅号をやめて友次郎と本名で作品を発表している。「あわただしく飯かきこみてあわただしく曇れる朝の野に出でにけり」といった素朴な、しかし生活の場からしつかりと歌い上げる作家であつたように思う。

この手紙は大正十二年の五月十六日に出されている。短いので経緯は判らないが、諧謔調な文面から推測されるのは、引つ込み思案な友次郎が牧水が出て来いと誘い、喜志子夫人がやさしくフォローしている様子から、何回かの手紙のやり取りの一つであろうと思われる。誌友からの誘いも楽しい。この誘いに乗つて、友次郎は、魚でもぶら下げて牧水宅を訪ねたに違いない。牧水三十八歳、友次郎二十四歳。その時の友次郎のはにかみと興奮を共感しながらこの手紙を読んだ。

文中の汀峯は沼津市西間門の長倉宜一、修二は愛知県新城出身の金沢修二、抱星は沼津市東間門の田中要吉、利雄は大悟法利雄。青葉会がどのような会だつたか。沼津近辺の在住者を中心に牧水宅に集まつた青年たちの私的な集まりではなかつたかと推察される。

なお、この手紙は高島友次郎のご子息高島明世氏から遺歌集「高島友次郎歌集」と共に、本会に寄託された遺品の中の一つ。記念館展示室の牧水の復元書齋に展示されている。
(須永秀生)

酒の神話・日向の神話

岡野弘彦



第54回沼津牧水祭短歌大会で講演する岡野弘彦先生

私は六年ほど前から東京に住んでいます。以前から東京というまちは大嫌いです。敗戦後の東京は刻々にアメリカの模倣になってしまいました。まちだけではない、人の生活のありよう、ものの考え方も、政治も、経済も、あらゆる点でアメリカナイズしてしまつた。

一番酷いのはテレビですね。アメリカの人気番組の真似ばかりして日本の商業放送は酷い放送をやっています。三日程前、新聞の番組欄を眺めると、大食い大会というのを三時間延々としてやっている。どんな番組だろうかと、そのチャンネルを回してみましたが、実に酷い。今、世界中で、今日のご飯が食べられなくて困っている、あるいは

一日一日飢えてやせ細って死んで行く子供たちが大変な数いるのです。そういうことを考えないのが、まずはアメリカであり、次が日本です。テレビで大食い大会を延々と三時間もやって、ああいうのを企画する者も、出演する者も愚かですが、見ている者が一番愚かなのです。視聴率が低くなれば、ああいう番組は、いくらアメリカから入つて来ても消えるわけです。しかし、日本でああいう番組が成り立つということは、世界の中でいかに日本人が思い上がった民であるかということです。

戦争に負けて六〇年。負けたということは、一九四五年八月一日に負けたのではないのです。二〇年、四〇年、六〇年経つて、なおじわじわと、その負けた痛みが、我々の心の一番大事な部分、背骨の部分、我々の心を蝕んでいるのです。蝕まれた我々は、蝕まれているだけではなくて、しゃんとしていなければならぬ。政治的、経済的、外交的に負けたのですから。憲法第九条によって自分たちは決して戦争はしない、核爆弾を二個も落とされて、我々は決して核爆弾なんか持つまいと決心したわけで

す。これは世界中の憲法の中で一番すぐれた憲法なのです。今も延々と戦争を続けている国の人々に説いても、大変すばらしい。今の地球のなかで生きていく上で一番大事な主張になるはずなのです。

しかし、こんなすばらしい憲法を持っているのに、もう辞めてしまいましたが、総理大臣は戦後レジームはやめよう、憲法を見直そうと言い出しました。六〇年経てば見直さなければならぬところも少しは出てきますが、見直さなければならぬところ、世界の国の中で一番誇るべき憲法を持っているのだというその誇りを少しでも変えるようなことがあつたら、あの戦争で何百万という死者たちに対して、私たちは一体なんと答えることができるのでしょうか。死んですべてのものが消えてしまうのだと思う人は、そういう虚無的な考えの中で生きていけばいいでしょうけれど、多くの人々は、死んだ後にも魂の世界はあるはずだという信頼を持って生きているのです。

あのむごい戦いで、銃を持って向かい合つて戦つた人ばかりではなく、年寄りも幼い子も無差別に日本の都市は爆撃されて焼かれたわけです。沖縄などは蹂躪せられたわけです。軍人たちが意地を張つて戦争を引き延ばしていたならば、日本のほとんどが焼け野原になったかも知れない。北海道や九州は独立し、北海道はソ連が領有するといった悲惨な状態になったかも知れない。

い。世界でいくつかそんな例があり、隣の韓国と北朝鮮は今でもそれで苦しんでいる。

そんなことは、歌には関係ないと思うかも知れませんが、そういうことをこそ心に持つて我々は歌うべきです。魂の表現の形として、連綿として祖先から伝えられて来た、世界に類を見ない伝統的な定型詩が短歌なのです。僕たちの年代の者までは、敗戦後一〇年、二〇年、真剣に戦争への反省を歌いました。それから段々段々、戦争を知らない、そして観念だけの頭でつちの若者たちが増えてきて、大学紛争、そして最後には仲間同士が痛め合い、いじめ合い、殺し合うような内ゲバの泥沼の中に入つていった後の若者たちは、何をやる意欲もなくなつて、クラスの中で討論会、文学創作のためのサークルさえ持つことがなくなつた。大学の一年上の学生とも、一年下の学生とも語り合うことがなくなつた。こういうところは、負けた国の情けなさがじわじわと内部の心の一番大事などころへ浸透してきた証拠です。

戦争に負けるということは、伝統的なものを誇りと思わなくなつてしまう。一番大事にすべき心の拠り所を大事にしなくなる。だらしなくなつてしまふ、考えなくなつてしまふ。ですから知らないわけです。「歌が、軽く軽くなつて、新聞の見出しの言葉のような、内容のほとんどない歌の羅列になつた」と、そういう意味のことをおっしゃつた人がいたが、現実にはそうなつ

たのではなく、我々の中にそういうことを真剣に考えようとする心がなくなつた。短歌の場合には心が言葉と重くつながり合うわけですが、心がなくなつてしまつたから、短歌がおのずから非常に軽い、吹けば飛ぶような歌ばかりになつてしまつたのです。差し障りのない、作者がだれであるか、どういう状況であるか、どこへ持つて行つてもある程度理解はされる。しかし本当に言おうとする心が入っていないから、ああそうと返事をしてしまつておけば、それでおしまいという歌になつてしまつていふのですね。

短歌はこんなものではなかつた。天国か地獄か、牧水さんが一番行きたかつたのは、お酒の極楽でしょう。お酒が滝のように流れている極楽でしょう。そこへ行かれたかどうかは知りませんが、この世ならぬ世界で、なんと情けないことかと思ひておられるのではないかと思います。しかし、僕は悲観論者ではありません。短歌が定型詩として確立してから少なくとも千四百年、我々の先祖たちは歌を作り続け、すばらしい作品を残しています。万葉集、あるいはそれ以前の古事記、日本書紀、風土記に収録されている古代歌謡から始まつて現代まで、いい歌はいい。力ある言葉、力ある歌は屹立している。

敗戦から一〇年、二〇年くらいまでは、小説でも、詩でも、短歌でも、俳句でも、よい文学が生まれたのです。その辺りから後、文学は衰え、段々、段々だらしなくなつた。作つてい

人の数は多いのですが、俳句人口なんかは大変な数です。俳句の結社の会をやったら何千人って集まって、東京のホテルでも会場が見つからなくて困っているとか聞くと、そんなの一体何なのって言いたい。このごろの俳句の……これくらいでやめておきましょう。

私は、お酒はほとんど飲まない。飲めないというのではなくて、飲まない。伊勢と大和の国境の、三十五代目を継がなければならぬ世襲の神主の長男に生まれましたから、子供のときから神主を継ぐための激しい修行をさせられました。南朝の北畠氏の祈願所から始まった神社で、神道と修験道が混じって、小学校五年生のときに父親が隣村の大先達に私の身柄を任せました。そういうときの挨拶は、煮て喰おうと、焼いて喰おうと、息子の身柄預けますというのです。一日に五十何キロも行場を歩かされて、しまいには感覚がなくなつて足の裏がフワフワになった。その後入った中学は、伊勢の神宮皇學館という神主になるための全寮制の学校でした。したがって、両親にすっかり育てられたのは小学校卒業までで、後は中学校に入ったその日から、上級生の肌着や柔道着、剣道着まで洗濯する。その頃は洗濯板に固いせつけんで洗ったわけです。一部屋に五人、ですから上級生が四人いるわけで、それだけ洗濯すると手の皮がむけ、しばらく治らない。治つ

たころには、また柔道着、剣道着を洗濯しなければならぬ。そんな修行をさせられたから、非常に厳しかった軍隊の内務班に入ったときのほうが楽でした。ただ、軍隊で憂鬱なのは読書など知的な時間が制約されていることでした。

そういう下地があつたものでしたから、一身独身生活を貫かれた折口信夫（釈道空）先生のお宅へ入つても、先生が亡くなるまでの七年間、先生の学問の手伝いをし、原稿の清書をし、毎晩二時ころまで先生と向かい合つて口述筆記をして原稿を作り、先生が初案の歌を手帳に書き止めると、すぐに原稿用紙に整理して先生のところに置いておくと、先生が推敲してそれをまた原稿用紙に整理する。そういう仕事のほか、慶応と國學院大学の両方の教授をされ



折口信夫 昭和23年1月(折口博士記念古代研究所提供)

ていましたから、講義のあるときはついて行く。地方に講演に行くときは学生服に着替えてついで行く。その頃先生は六十代でしたが、独身でしたから、軍隊から帰って二十代に入ったばかりの私が料理をやるわけです。余談ですが、この頃、家内が脳梗塞の後、手が震えて包丁が持てないものですから、さらに巻いてしまつておいた昔使つた包丁を出して来て僕がやるわけですが、家内よりはるかに上手いのですよ。折口信夫という人は美食家でしたから七種類くらいの料理をつくらなければいけなかつた。そういう生活をしてきましたけれど、苦痛には思わなかつた。

そういうなかで、一時間半ほどの先生の晩酌の相手をしなればならぬとき、私はお猪口に ついだビールを舐め舐めして相手をしていた。神主の家というのは村の人々がしょっちゅう集まって来て、酒を飲んでいたのを見せつけられていた。昔の村の生活は苦しく、戦後の豊かな生活とは全然違つていましたから、お祭りのときなんかは只酒が飲めるというのは村人にとつて恩典だった。そこで、とことん飲んで、喧嘩が始まつたりして殺風景な雰囲気になる。真つ赤な鬼のような顔をして争つた

りして、子供心につくづく酒というのは嫌悪すべきものだと思った。それがきつかけで酒を飲む気がしなくなつた。

それと、折口先生のところで学んだのは、先生のそばに生活していると、全寮制の学生生活や軍隊の内務班の生活に耐えてきたから、ちゃんとした生活をする習慣はついていたのですけれども、たまに先生だけが東京から地方へ出掛けて行くときがあると、ガタツと気が緩んでしまふんです。それは私のように毎日先生のそばにいる者だけではなくて、週一回先生の所へ集まる、私より十歳以上年長の戯曲家の伊馬春部、池田弥三郎、戸板康二といった兄弟子たちでさえ、「身体の籠かたがが緩んでしまふ」と言っていました。一緒に生活していると、ちつとも厳しいとは思わなかつたのですが。

美食家で、浪費家で、私が先生の家の会計を預かっていたわけですが、亡くなつたとき三十万円残っていただけで、いろいろなところで清廉の人、金銭に淡泊であつた人ということで話題になりました。門弟たちを連れて旅行に行くとき、旅費は全部先生の財布から払わせるという具合で、二つの大学の教授をしても残らないわけです。そういう先生のそばにいますと、非常に伸び伸びと、人間として伸びやかな心になりました。ただ、鈍感な心の状態になつたときは叱られました。そうして、普通の人よりシャープな心でいなければならぬということ

が段々分かつてきました。

先生は道徳家の窮屈な条件を課していたわけではないのです。文学なんかは、敏感な、しかし、伸び伸びした自由な心を持つていなければよい作品ができるわけがないと言つていた。よく見ていきますと、段々分かつてきたのですが、優れた短歌を作ろうと思う人は、ぜひそういう心をお持ちになられるとよい。我々、日常は平らな心でいますが、それを地上から一〇センチでも二〇センチでも持ち上げた心、それが自在で自由にシャープな心なのです。その神経をいつでも持つていられるのですね、あの人は。ですから、さあ歌を作ろうという気構えになると、さあーと沸騰点まで上がるのですね。ところが、我々は落としていますから、歌を作ろうと努力しても、せいぜい五〇度か六〇度の生煮えの作



岡野弘彦先生（左）と折口信夫（右）
昭和23年東京大森にて
(折口博士記念古代研究所提供)

品ができてしまふ。そこに違いがあるというところが分かつたわけですが、それは内弟子にならなければ分らないことですね。朝から晩まで何年間か先生のそばで先生とともに呼吸しながら生活していると自然に分かるようになる。

言葉で言つてくれるわけがない。言つても分かるものではなく、自然に感じていくよりほかないものです。そういうよき伝統は我々の少年時代、青年時代まではあつたのですが、敗戦後、全然なくなりました。内弟子というと、大工さん、左官屋さんとか、画家とか、将棋や碁を打つ人たちの間にあつたもので、徒弟制度といつて戦後は軽蔑しましたけれど、戦争に負けて、守るべき伝統を守らなくなつてしまつた日本人の情けなさもあるわけです。将棋などでも内弟子というのはなくなつてしまつています。それはそれで成りたつていますが、コン

ピューターに負けそうになっています。先日、渡辺明さんという二十台前半の若い才能のあるトップクラスの将棋指しがコンピューターと対戦して辛うじて勝ちましたが、まもなくコンピューターに負けるだろうと言われています。強い棋士たちがコンピューターに負けるようになったら、一体どうなるだろうかと、ちよつと面白いのですが、そういう意味では伝統的なものが今大きな危機になつていふ。一番いけないの

がお相撲です。旧態依然としていて、新しい時代になつたら心を引き絞つて、その時代の創造的な自分たちの芸やスポーツのあり方を築き上げていく努力をしなければならぬのに、旧態依然としたままでいるからどんどん崩壊していく。

短歌の余命だつて、このまま行つたら非常に短いものになるだろうと言わざるを得ません。折口信夫は、大正の終わりの頃に、歌の円寂するとき、言葉としてはいいけれど、『短歌滅亡論』に、短歌は滅びるよりしようがない、という非常に鋭い評論を書いている。



伊馬春部(左)と折口信夫(中央)と岡野弘彦先生(右)
昭和27年三島大社にて(折口博士記念古代研究所提供)

牧水先生の『牧水 酒のうた』(平成十九年、(社)沼津牧水会刊)を送つていただいて、酒の歌の多いことは、そして酒の歌に魅力のある作品が多いことは前から当然分かつていましたけれども、やっぱりあらためてこうして牧水の酒の歌を見ると、まあ本当に酒の好きな人ですね。牧水さんの酒つていうのは、僕の子どもの心にいやだなあと思つた酒とは非常に違つた酒なのです。大体こゝろ孤独で、そしてしみじみと思

いを深めて飲む。そういう酒ですね。それから、そういう心の中で、そういう思いの中で、寂び声でと書かれていますけれども、寂び声で自分の歌を朗詠する。酒が入つて、そして自ずから心が動いて、牧水さんが寂び声で自分の好きな歌を朗詠してられた。それが録音せられていたらどんなに素晴らしいかと思うのです。残念ながらそれは残つていません。そして、お弟子さんたちは、先生が朗詠を好きだったから、大悟法さんはじめ牧水門下の方たちは、皆朗詠がなかなか上手い。

戦後の若い者はだめですよ。朗詠なんてものを知らない人たちが沢山いる。ですけれども、牧水さんに生きて接した方々は、なかなか朗詠が上手いんです。録音された何人かの方のものを私は聞いておりますけ

れども、大変いい声で、しかも高い声で声を張つて朗詠せられる。直門の方たちは、きっと晴れの場で牧水さんが声を張つて朗詠するのを聞いていられて、それを真似なすつていられると思うが、一人で盃を傾けながら自ずから興に至つた、興深まつたというふうな気持で寂び声でしみじみと朗詠しておられた牧水さんの朗詠とは、ちよつと感じが違うんでしょうね。

そういう酒の歌、そしてこの選ばれた歌の後に、酒についての随筆『私と酒』が載っていますけれども、それなんかを読むと、古代から日本人が自分たちの生活の中で酒というものをどんなふうにして大事にし、どんなふうにか考へてきたか分ります。古代のことですから、神話と歴史事実とはつきりと分けた考え方で書かれていない。歴史と神話とが牧水さんの心の中で一緒になつていっているわけですから。そうかと言って、国文学の古いところを私は専門に研究しているわけですから、神話と歴史事実とが明確にあらゆる点で分けられるというのではないのです。ただ、日本の古代学は、とてもとても古いところ、神々の世界というふうなことになる。どこまでが神話で、どこからが歴史事実となつていくのか解らない。しかも、そういう部分は、戦前、戦中は触れることが禁じられていた。言うことがタブーになつていました。

つまり、天照大神の孫である邇邇芸命が

九州の高千穂の峰に降つて来る。そして日向で三代を過ぐすわけです。それは、皇室の祖先であつて、そして皇室の祖先としての御陵が日向には、日向三代の……。まあ、神武天皇はもちろんだ和の畝傍の陵ですけれど。それ以前の神話の中の系図の方は、実は神話ではなくて、古事記や日本書紀の伝えの中では歴史事実になっている。神話の系図と歴史の系図とがつかないで、あるわけですね。本当は、これは木に竹を接いだようなものである。しかし、それによつて皇室の尊厳というものを大きく、深く印象付けようとしたわけです。戦後は、学問として正確に捉えるべきだとして、そしてそれについて何の制約もないわけで、戦前や戦中のように不敬罪に問われるというような重苦しい気運はなくなつたわけですけれども。でも、そういう古代学の緻密な研究になると、なんとなく戦前の私なんか重苦しい気分が少し肩にかかつてくるような気がします。戦後六〇年経つても日本の古代を研究する、そういう部分はなかなか理想的な緻密な形にはなつていないわけですけれど。

しかし、牧水さんがこの随筆「私と酒」を書かれたところは、やはり神話と歴史というのはあまり区別しようとする意識はなかったから、神話的な話が歴史的な事実のように書いてありますけれども。とにかく牧水さんはそういう古代のことに、やはり自分の関連することについては興味を持っていられた。あるいは、深い関心

を持っていられた。酒だけではなくて、牧水の生まれた日向の国。これは、少年時代のことを回想して書いておられる文章の中に、生まれた山の中から耳川を小さな船に乗つて下つて来ている。そして、美々津の港に近づいて海が見えた時、青々とした海が視界に入つて来た時の感動というふうなものを非常に深い印象として書いてられる。

ああいうのを見ると、やがて牧水が自分の歌が自在に詠めるようになって、そして情熱的な恋をし、その燃えるような想いを伸びやかな短歌の中に表現してられる。そして、歌集の名前なども『海の声』という名前を付けて。あるいは、『海を見よ海に日は照る……』。年は取りたくないもので……。忘れてははずはないものがひよつと出て来なくなる。教室なんかではごまかしましてね、ちよつと他の話をわざとしながら、「なんだったけな、なんだったけな」と考えながら、「山を見よ山に日は照る海を見よ海に日は照るいざ唇を君」。

少年時代、こんな歌、本当になにか心に染み透るような感じがして。それから、同時に、黙つて読んでいるというふうな気持ちにならないんですね。どうしても声に出して読んでみる。さらに、自分で自分流の節をつけて朗詠してみる。これが、戦後ちよつと跡を断つた。今の若い歌人たちに「前田夕暮という人は朗詠が



若山牧水 (明治41年)



土岐善麿 (明治41年)



前田夕暮 (明治38年)



齋藤茂吉 (昭和15年)
(齋藤茂吉記念館提供)



北原白秋 (明治37年)

うまかった」、あるいは「土岐善麿さんという
は、破調の歌も見事な調べをもって朗読した」
(土岐さんの場合は、朗読というより朗詠です
ね)。まして、「牧水という歌人の朗詠ってのは、
すばらしく人の胸に染み透つたらしい」と言う
と、「えっ、短歌を朗詠するんですか」。何か奇
妙な感じを持たれるんですね。

そういう面では不器用な齋藤茂吉さんだって、
随分個性に合った朗詠をされる人なんですよ。

ゆふされば大根の葉にふる時雨いたく寂し
く降りにけるかも 『あらたま』

茂吉の東北弁が、あの人の歌の良さを引き立て
ているわけです。コロンビアで片盤のレコード
に録音したんです。その録音の帰りの道が思いが
日記に書いてあります。「ダメであった、全然
ダメであった」。自分に怒っているんです。茂
吉は怒らなくてもよかったですのと思うんですね。
いかにも、前田夕暮や土岐善麿、あるいは白秋
もなかなか朗詠が和やかでうまいんです。そう
いう人たちのように滑らかに朗詠ができない、
あるいは、しないところが山形県出身の齋藤茂
吉の面目の躍如としてるところですね。

そういう意味では、やはり牧水さんの朗詠つ
てのは、いかにもこの人の身に付いた短歌の表
現法であったと。歌は歌うものですから。そん
な活字大にいくらなつたからといって、小さな
活字に組まれたものを、何か肩の間にしわを寄
せて、声にも出さないで読んでいたのでは、歌
は半分その力を失うわけです。かえってヨー
ロッパの詩人たちのほうが詩の朗詠というもの
を今でも盛んにやりますね。

この頃、その詩人たちの朗詠の影響を受けて
歌人たちもいくらか朗詠するようになりまし
た。でも、もう我々の先輩たち、私の師匠たち
の時代の人たちが持っていた朗詠、あるいは朗
詠は失われてしまいました。殊に朗詠は漢詩の
吟詠とはまったく違うのです。鞭声(べんせい)粛々(しゅくしゅく)調で

和歌を吟詠したら、これはもうボキボキになっ
てしまう。あれは、長い仏教音楽の伝統、和讃
とか声明(しょうみょう)とか御詠歌とか、日本人が長く自分た
ちの逸文あるいは歌、あるいは唱えことも、で
きるだけ神や仏に通じるように、あるいは自分
たちの心に響くように詠んできた。後白河法皇
なんてのは、今様(いまよう)という五七五七七五七とい
う短歌と限りなく似ている感じを持つあの頃の
歌謡ですね、それを朗詠することに情熱をかけ
て一生のうちに三遍声をつぶしたという。まあ、
一人前の浪花節家になるには、少なくとも一遍
は声をつぶさなきゃならないという。後白河法
皇は、明けても暮れても夜も昼も身内の者が死
んでも朗詠してられ、三遍声をつぶした。その
情熱を今度は短歌の上に受け継いだのが、後鳥

女水朗吟の図



牧水朗吟の図 (茨木猪之吉 画)

羽院。新古今和歌集は、定家によってあんな形、あんな素晴らしい部分が盛り上がったのではないのです。定家よりもっとすごい後鳥羽院という人が定家なんかを時には叱咤し、時には励まし、あの新古今和歌集の見事な結晶体が出来上がったのです。後鳥羽院の短歌にかけた情熱の基は、おじいさんの後白河法皇のあの今様、朗詠の情熱ですね。

牧水さんの話に戻しますが、牧水さんは日本の近代が開けてくるあの明治三〇年代あたりから、実に情熱的なそして新鮮さを感じさせる歌を次々に詠み出された。それが、ずっと若者たちの心を刺激しつづけていて、私なんか中学生のころは牧水の歌が一番、牧水と啄木の歌が一番好きでした。それから、もう少し上級のころから大学の予科に入る頃には、古泉千樫とか中村憲吉といったアララギの少しかつちりとした歌人たちの歌に非常に惹かれました。そういう歌を中学生の頃は、啄木調の歌、これはしかし本当は一番難しいんですね。それから牧水調の歌、これはちよつと真似をして上手くいくとうれしいんです。しかし、卒業したころは古泉千樫あるいは中村憲吉それから釈道空・折口信夫ですね、という風な順序で私は懂れの歌人が移っていった。

そして、折口信夫先生のところへ内弟子に入つて、そこからは、ひたすら普通よりも深く



釈道空短歌総集

心を保っている日常ね、ストンと落とさない。それが大事なんだぞと思つて、その心を何とかして少しでも身につけていこうと思つたわけです。そして先生の講義を聴き始めてから一〇年、先生の内弟子になつてから七年経つた頃、何か無性に体から湧いてくるようにして歌が出来始めた。そのテーマは、あの軍隊生活、それから敗戦直後の……。

あの頃、我々に「今こそお前たち若者は」と呼びかけ、昭和一五年は紀元二六〇〇年、そして紀元二六〇一年、二年というふうにならしたのですが、「輝かしく伝統のある日本の国の為に、天皇陛下の御為に深く命を捨てて戦つて来い」と、事あるごとに。ついには昭和一七年、一八年、一九年ころには、卒業式、入学式、なんか事あるごとに、「配属将校あるいは学長先生が言

われるわけです。一番死ななきやなんないということが、もうこれほど日本の……。

まず飛行機が潰れてしまった。航空母艦もほとんどなくなつてしまった。そして日本は、あらゆる包囲網の中にかろうじてまだ氣息奄奄となつている。もう俺たちがやつぱり、爆弾を抱いて敵艦にぶち当たっていくほかしうがない。それでも勝てるなんて可能性はないけれども、二ヶ月でも三ヶ月でも自分の親たちや自分の兄弟、あるいは自分の恋人たちが生き長らえてくれるのならば、というふうな気持ちになつていったわけです。そういう若者になお死ぬ！死ぬ！というのは、なんとという酷い大人なのだろうと思つていましたけれど。

神話の中に出てくる父の景行天皇から、九州まで下つて行つて熊曾建の統率者の熊曾建を討伐して来い、と命ぜられる。まだ少年ですから女装しておばさんの倭比売が与えてくださった女の着物を着て宴會に紛れ込んで、そして酔つ払つている熊曾建を刺し殺すわけですね。その時に熊曾建が「しばらく待て！」。刀を突き刺して胸を抉ろうとすると、その手を押さえて「しばらく待て！」俺ほどの剛の者を見事に刺した。お前の名前は何と言う。「倭男具那王なり」。倭の若者ですね。「倭男具那王なり」。倭の少年ということですが。そうすると、熊曾建はさすがに九州の豪族、「これから後は倭建と名乗られるがよ

かろう」。建という素晴らしい名前を、熊曾建の建を譲るわけですね。そして、相手を祝福するわけです。それから帰って来ると、また「出雲建を討伐して来い」。これもまた計略を巡らして、つまり力よりも知恵を働かせて帰って来ると、またすぐさま、ほとんど軍勢も与えないで「東を平定して来い」と父の景行天皇が言う。古事記の中の倭建神話は実に涙ぐましい。これでもか、これでもか、というほど父から追放せられて、そしてとても達成できそうにも思えない使命を与えられる。それで遂に「東を平定してこい」と言われた時に、倭建は本心に心がちぎれるわけです。あの剛の者が。そして、おばさんの倭比売が齋宮をしておられる伊勢神宮へ行つて、おばさんに向かって「わが父は我に死ねと思し召すか」。私の父、景行天皇は私に死ねとおっしゃるのだろうかと言つて涙をこぼすわけです。「古事記伝」の解釈の中で本居宣長が「かなしともかなしとも思ふ言葉なり」というふうに言っています。僕は伊勢の神宮皇學館中学部ですから古典ばかり授業で教えられた。そのところが心にこびりついて、昭和一八年頃、倭建は俺たちだ、そんなふうに通つてました。神話つてものが人々の心にそういう形ででも生きていた時代なんです。ましてや、我々よりも前の明治の牧水さんなんかの頃には。

日向神話というもの、にぎはひのむすこ 邇邇芸命から神武天皇

まで三代が日向の国で過ごす日向三代の神話は、実に楽しい。それから情熱的な歌がある。海幸、山幸の話、それは邇邇芸命から二代目の皇子に絡まった話ですね。海の神様の娘さん、豊玉毘売、それから玉依毘売という二人の姉妹が日向の倭族の祖先の二代にわたつてのお妃になつて、そしてそこに大変いい恋歌がお互いに詠まれるわけです。

赤玉は緒さへ光れど白玉の君が装し貴くありけり

「赤玉は緒さへ光れど」おそらく珊瑚かなにかの海からの赤玉。白玉、おそらく白玉は天然アワビの天然真珠でしょう。それから赤玉というのは珊瑚なんかの枝が折れて、そして渚できれいに磨かれて赤い玉になつて海岸に漂い着いて来る。これが赤玉でしょう。

「赤玉は緒さへ光れど」素晴らしい海の産物の赤い玉は、古代人にとつて魂が宿っているから「玉」なんです。単なる丸い物、単純な物ではないのです。そこに魂が宿るから玉。白玉、赤玉。その「赤玉は緒さへ光れど」そこに通してある紐すら輝いて見えますけれども、「君が装し貴くありけり」何といつても我が君様、山幸彦の正装なすつたそのお姿が私には貴く思われますという、女性の深い心を寄せた恋歌ですね。そして、そんなふうに通つて夫を愛めるわけですね。しかし、お産をする段になつて「私はお産をしますから、しばらく私の姿を御覧なさいま



神武天皇の一行が出航していった美々津の海（日向市観光振興課提供）

すな」。今はね、男性が側に付いているんだそうですね。僕はあんなことはできませんよ。昔はやはり女のお産をする姿を夫は見ないという、それが日本の男性たちのエチケツトであり、約束であったわけです。ところが、待ちかねてふっと物の間から覗いてしまう。そうすると、海の神のお姫様ですから、お産をするときなんかには元の世界の姿になって、八尋鯉の姿になって、幾尋も幾尋もある大きな鯉、これはあのクロコダイルとか南方のワニじゃなくて、おそらくは、サメ、フカ、大きな海の魚の名前だろうと言われています。その幾尋も幾尋もある大きな鯉の姿になって「匍匐ひ委蛇り、七転反側」していた。そして産屋から産み終わって出て来て、「あれほど御覧なさいますなどお約束したのに、見ておしまいになった。他界の海の神の娘としてのこの世ならぬ姿を見ておしまいになった。約束をお破りになった。もう私はこの世にいたることは出来ません」と海の世界に帰っていく。しかし、生まれたての子供を養育しなければならぬ。それで代わりに自分の妹をよこすわけです。そうすると、その妹が、その子を養育した後、そのお妃になる。だから、二代にわたって、日向三代の二代にわたって、海神の神の娘がお妃になっている。

それから、初代の天から降って来た邇邇芸命のお妃になったのは、山の神様、山神の神様の娘さんの木花佐久夜比売という美人のお姫

様です。富士山なんかの神様になっていきますね。そういう三代があつて、そしてその次に生まれた四人の男の子達が自分達の生活の場、都をもっと東の方へ移さなければならぬ。我々大和族は、大和の国が一番中心へ移ろうというので、東の方へ東の方へと来るわけですね。出て行ったのが耳川の河口の美々津という、美しい津。津は港ですね。美々津の港という所そこから船出していった。今でも美々津の港へ行きますと「日本海軍発祥の地」という大きな碑が建っています。戦争中海軍を率いて海軍大臣にもなった、何とか大将の揮毫です。「えーっ」と思つて、土地の人に話を聞くと、沖の方に二つ、いや三つ島がある。あの島とこの島の間を神武天皇の一行の船は出て行った。だから、今でもこの港の漁師たちはあの島とあの島の間は通らずに他の島の間を通つて漁に出る。こういうのは何か感動的でしょう。神話が今の人々の、あの美々津の港の漁師さんたちの生活の中で生きているわけです。あの方たちは大和へ行つてしまつて再び帰つて来なかつたから、我々はあそこは通らないんだと。いいなあと思つてですね。そういう土地、日向の海岸が持つている、それから大和、海を持つている日本人の神話。

敗戦後、神話というものを生半可な知識のある連中が非常に軽蔑しました。あるいは排除しようとした。



美々津の港の「日本海軍発祥の地」の大きな碑

歴史的な事実は、これは現実はこの世で人間が行つた事だから意味がある。(なんでそれだけで意味があるか、本当は説明は完全には解りませんけれども) 歴史事実は研究に値するし、知つておいていいことだ。しかし、神話は根も葉もない根拠のない事だからそれは知らなくてもいい。あるいは、むしろ知つていると邪魔になると。

世界中で神話を持たないという民族は、滅びた民族だけです。神話がないから神話を一所懸



命持とうとして無理している民族はありますよ。アメリカです。あそこは新しい集合国家ですから。そして、それ以前に神話を持っていたあのネイティブ、原住民たちを従がえたり、追っ払ったりして、あのアメリカを作ったわけです。でも僕はアメリカを軽蔑しているつもりは全くないのです。全くないのですけれど、ただ、日本をあんな苦しい激しい戦争をして降伏させた後、ほとんど戦争しない時期つてないでしょう。アメリカには、すぐに朝鮮戦争が始まるでしょう。あの陰惨な冷戦、ソ連との実に陰惨な戦争ですね、それが世界中を暗くした。それから後も延々としてベトナムにしろ、イラク戦争にしろ、戦争をしてない時はないわけです。そして今のブッシュつていう大統領は特に戦争好きなんです。

僕は、最近『バグダッド燃ゆ』という歌集を詠んでいます。その歌集の中で詠んだことの全

平成18年に現代短歌大賞を受賞した
岡野弘彦歌集『バグダッド燃ゆ』
(砂子屋書房)

部じゃありませんが、気分ではいへば……、まったく会ったことはないから、ブッシュさんとも話をしたこともないし、ヴァイン・ラディンさんと対談したこともないし、全然知りませんけれども。テレビで顔だけみていると、どちらが高貴な心を持っていそうな顔をしているかというところ、ヴァイン・ラディンの方がはるかに高貴な顔をしている感じがする。それからアメリカのキリスト教の全部じゃありませんよ、おそらくブッシュという人の信じているキリスト教の一派は、少し過激な傾向だろうと思う。キリスト教の中でもたとえカトリックなんかは非常に他の宗教に対しても寛容で、理解がありますね。ところが新しく起こって来たキリスト教の一派の中には、非常に排他的な狭い一神教的なものがあります。日本には仏教が古代にやって来ました。あの仏教という宗教は、やっぱり仏教とかキリスト教とかイスラム教とかというのは一民族だけの宗教ではなくて、人類教と言つてもいい大きなスケールを持つていけるわけです。そういう中でも仏教は、寛容性がありますでしょう。多神教と言つた方がむしろ相応しい。仏陀だけというふうな、唯一キリストだけというふうな一神教ではない。多くの仏像がいっぱいしやる。勿論それには格差というか階級が付けられていますけれども。その中でも浄土宗、浄土真宗になつていく浄土教

というのは日本人の心に合う仏教だったわけですね。仏教の中にも禅宗とか、あるいは古くから入つて来たいろいろな宗派がありますけれども、その中で浄土教というのが一番日本人の心に合う条件を持っていた寛容な宗教です。その仏教の影響が日本人の心を宗教的に導いたというところは、幸福だったと思うんです。

つまり、仏教、儒教、様々なものが入つて来て、儒教や仏教によって心を導かれる以前の遠い古代の理想とする生活の中で、日本人が何を願わしいものとし、何を美しいものとし、何を醜いものとして区別して、美しいもの、良きものを自分たちの生活の中に取り込み、増やしていこう、深めていこう、悪しきもの、憎むべきものは排除していこうという情熱は当然あったわけで、外から仏教が入つて来る以前からそういう心を持つていた。それは日本人の根生いの宗教と言つてもいいものです。それと後の神道とピタッと重なるかどうかというと、そう簡単ではない。神道にも神社神道とか、あるいはその他宗派神道とか、色々な形で時代によって特色がありました。とにかく、そういう日本人の根生いのより良き生活への情熱、あるいは祈りの心、というふうなものをまず知っておきたい。それは至難のことですけれども。

言葉は、古代の大和言葉があるけれども、中国から漢字や漢文、漢詩が入つて来て、我々は

記録することを覚えたわけです。アイヌの人たちはついに固有の文字を持たなかった。しかし、口伝えて神々のユーカラ、英雄のユーカラというふうな神話はたくさん持っていた。金田一京助博士がそれを記録せられたわけですけれども、それと同じことで古代の日本人も大和言葉は持っていた。

古事記や日本書紀あるいは万葉集の古い所に伝えられて来るあの古代歌謡、時には短歌の形をもっているのもありますね。

八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣つくる
その八重垣を

というのは歌の親だと言われている。

須佐之男の神が高天原を走り、技を行って追放せられて、出雲の肥河上で苦しんでいる親子を助けて、その娘の櫛名田比売とスイートホームを持った時のその祝福の歌、それが日本の歌の始めであると伝えているわけです。江戸時代のあたりまでそれを信じていたわけです。それが歴史的な事実であるかどうかは分らない、神話的な伝えです。しかし、そういう心で我々はこの和歌というものを、神に祈る言葉、それから神が我々人間に「こういう生き方をしなさい」とあるいは「こういうことをしてはいけません」という神の啓示を与える時の言葉、それから人間の側からそれに対して感謝とそしてまた新たな願いを申し上げるその言葉、それが歌の基である。歌の始まりである。あるいは、男

女の間の深い愛情を告げ合う言葉、まず、女神の伊邪那美の「あなにやし、えをとこを」というわけです。それに対して、男神の伊邪那岐が「あなにやし、えをとこを」、この愛と尊敬の深い言葉が日本の歌のルーツ、一番原型の一つ。

そういう神話的な時代から延々として日本人が自分の一番想いを込め、魂を込めて神に訴えたり、あるいは自分の恋人に訴えたり、あるいは自分の大事な親やあるいは主君に訴えたりする。それからまた、そちらから言うべき言葉と言ってきた。その形を短歌というのが、むしろ和歌と言った時代の方がずっと長い。そして、万葉集の短歌という言葉も長歌という言葉も分類の上の言葉として使われている。その使われ方を見ても短歌というのは長歌に対して短いかから短歌なんです。非常に即物的な名前の付け方なんです。和歌というのは必ずさつき言ったように神に申し上げる。神からまたお示しください。恋人に歌を贈る。向こうからも返ってくる。つまり、愛は直ぐ心、魂を通い合わせる歌。だから和歌。「和」という言葉を用いているわけですね。だから、和歌と言う言葉は決して恥ずることではないのです。

ただ、近代になって、正岡子規のあたりから、和歌は長い伝統があつてマイナスの面が色々積もってきているから、こちらで短歌という言葉に言い換えて新しい時代の新しい歌を作ろうと。それが和歌革新運動というやつです。それ

はその時点では大変有効であった。しかし、もう一世紀も経っているわけですから、我々はそんなことにこだわる必要はない。私は和歌という言葉も大事だし、好きです。研究の上では「日本和歌史」とか「貴族和歌の研究」とかいふふうな言葉で言います。現在の作品を言うときには、普通に「短歌」と言っておりますけど。こういうところも、もう正岡子規にあるいはアラギ派に義理立てする必要はない。また、新しい感覚でもっと違う言葉を作ってもよい。

それよりも何よりも日本人にとつて一番根源の短歌とは、和歌とはそういうものであつた。ヨーロッパの詩の一行に何となく限りなく近づいて、ちよつと頭の表層部で考え出したその比喩表現をどんなに上手く使ってみるか、というふうなことに一番大事な心を据えるような、そんな表現の形ではないはずなんです。だから、短歌を作るほどの人ならば、やはり出来るだけ日本の長い文学の流れを……。物語やなんかはちよつと置いといても……。

物語の成立では、源氏物語は世界一の文学です。世界の各国に翻訳せられて今でも沢山の人が世界で読んでいるわけです。そして感動しているわけですが、その感動の一番の核のところは、ちよつと建物の要所要所に柱があるように和歌があるからです。あの和歌の部分は語りの部分、つまり一部始終を語っている物語の部分よりは格段に抒情が濃密なんです。それは読

んでお分りになるでしょう。あの柱があるから源氏物語は非常に奥深い心を伝えてくれているわけです。翻訳するとき翻訳家は苦しみますけれどね。私もずっと「源氏全講会」という講義を隔週土曜日四時間ぶつ通して続けてますけれどもやはり和歌のところでは非常に心を振り絞って講義をします。物語のところよりも和歌のところでは聞いている方々に深い感動を伝えなければならぬ。それが、平板な形で和歌を現代語に訳するだけで済ませてしまう。現代の多くの国文学者の一番陥りやすい弊害なんです。和歌というものと物語の部分、歌うという部分と語るという部分は、これは歴然とそれを生み出した人たちの心の中で違っていたんです。だから、源氏物語を紫式部さんが読んで聞かせたとしたら、語る部分の物語の叙事的な部分と、もつと濃密な抒情部分の歌とは、聞いているだけで分つたに違いない。歌い方をはるかに大事にして、語りから歌に入った時です。聞いているだけで分つたに違いない。そういうものなんです。

ですから、牧水さんのおそらく若き心を刺激したのは、もちろん日本に入ってきたヨーロッパの近代の影響、それが日本の近代の始めになつて行くその新しい時代の情熱、それが当然あるわけです。しかし、同時にまた日向の国が持っている非常に深い、そして長い日本の神話の国だという誇り。それから、お酒を飲んで

でも自分の今の心のこたわり、あるいは、窄せまれている心を晴らすというふうな気持ちももちろんあるでしょうけど。しかし、この酒は遠い古代の神話の中では、ついでいうふうな、そういう心の長い脈絡を持つておられた。そこがやはり歌の上に大きな力になって表れている。遠い過去への洞察の心を持つていることは、同時に長い未来への予測の心を持つていうことなんです。今しかわからない人間は今しか見えませんが、しかし、遠い過去を知っている心、遠い過去に共感を持つてこのできる心、それは長い未来を予測することのできる力です。

そういう力を敗戦後の日本人は奪われてしまった。あるいは努力しようとしなかった。学校教育の中でも歴史教育を非常に軽んずるようになった。あるいは、古典教育を軽んずるようになった。だから、今の戦後の若者たちは、ほとんど文語で文体を作ることができない。短歌のようなあんな短い文体でも若者たちは作れない。だから口語で作るよりしようがない。千何百年磨きに磨かれた文語と、言文一致体が生まれてからたつた百年しかたつていない口語とでは、その練磨の度合いが大きく違うわけです。そのことを考えないで、「いや、口語でいけばいいさ」「古典も、口語、現代語訳で読めばいいさ」と。自分たちの国の古典を翻訳でしか読めないというのは、文化伝統の断絶であります。何のための文部省であるか。何のための学校教育

育であるか。何のための家庭のしつけであるかということですね。

(本稿は、平成十九年十月七日に開催された「第五十四回沼津牧水祭・短歌大会」における講演録です。)(文責 編集部)

〈講師プロフィール〉おかのひろひこ



大正十三年三重県生れ。神宮皇學館を経て國學院大學を卒業。昭和二十二年から釈道空(折口信夫)に師事し、その没年

(昭和二十八年)まで生活を共にする。第一歌集『冬の家族』で現代歌人協会賞、第二歌集『滄波歌』で釈道空賞、第三歌集『海のまほろば』で芸術選奨文部大臣賞、第四歌集『天の鶴群』で読売文学賞、最新の第七歌集『バグダッド燃ゆ』で詩歌文学館賞、現代短歌大賞をそれぞれ受賞。昭和五十四年から歌会始選者となり、昭和五十八年から平成十九年まで宮内庁御用掛。平成八年に創設された若山牧水賞の選考委員。歌集は、ほかに『飛天』『異類界消息』など。評論、随筆に『折口信夫の晩年』『花幾年』『折口信夫の記』ほかがある。

第十八回中学生短歌コンクール

みずみずしい精神の発露

第十八回中学生短歌コンクールには市内十六

校から総数一八三三首の応募があり、過去最高の応募数となった。フレッシュな口語調を通して新鮮な息吹を与えてくれる作品がそろい、入選歌五十一首を選出する作業は大変であった。特選作品について、コメントを付したい。

「寒いね」とそつと差し出す大きな手私の好きな照れた横顔 田村瑞季(第四中)

倭万智の『サラダ記念日』の作品を思い出させるが「大きな手」「照れた横顔」に対象者の特徴をよく捉えて、相手への思いを表現し得た。

ありがとう素直に言えない反抗期だった五文字の感謝の言葉 田中咲妃(第三中)

「ありがとう」の一語を通して、反抗期の中での複雑な自分の内面を見つめている。自己の内面凝視は少年期の知性の成育を示す。

真つ白な洗濯物から洗剤のかほりただよふ夏の夕ぐれ 浅賀 彩(第一中)

「真つ白な」の色彩感、「洗剤のかほり」のさわやかさ、視覚・臭覚ともに、夏の夕ぐれの涼しさとマッチし、効果的表現を形成した。

エアコンの部屋でうたた寝気が付けばふんわり肌掛け祖母の優しさ

松原誠也(第五中)

が象徴されている。

人類の自分勝手にたえかねて体熱くする水の惑星

松井佑太(第四中)

地球の温暖化を危ぶむ作者の思いを表白。「自分勝手に」に人類への批判、「体熱くする」という地球の現状、比喩表現が巧みである。

位置につきスタブロけつていざ勝負自信じて今風になる 土屋陽一(第四中)

集中力を一心にした作者が、スタブロをけつて駆け出した緊張の瞬間を主体に表現。次の過程を「今風になる」と比喩で状況を上手に詠出。

ふいた風にせみの鳴き声すいこまれ忘れ去られたぼうしもゆれる 中村たかね(片浜中)

夏の昼間、強い風が一瞬吹き抜けた光景か。蝉の鳴き声が一瞬止み、忘れられた帽子が揺れる。聴覚・視覚両面から瞬時の景を捉えている。

この場所であつたあの地獄全てを知ってる原爆ドーム 高村春奈(第二中)

現在はいきれいに整備された広島島の街。その中に無残な姿をさらす原爆ドーム。直かに接して覚えた原爆の凄さへの感動を素直に詠んでいる。

古都京都ろうそくみたいに立っている中央堂々京都タワー 杉本七星(大岡中)

神仏の前に明るく灯るろうそくと古都に立つ京都タワーに共通感を持ったのである。形状的な比喩としては良いと思われる。

志下坂を登つていけばだんだんと青く広がる静浦の海 鈴木峻平(静浦中)

中学校が坂の上にあるらしい。坂道を上るにつれて徐々に広がる視界。青々と広がった静浦の海、故郷への愛しみが下句によく表出された。口語で短歌の新時代を担うのは、若者たちなのだ感慨を覚えた。教室で熱心に指導されている先生方のご努力に感謝を申し上げたい。

須永秀生、曾根耕一、杉山芳春、青木朝子、星谷亜紀が選に当たった。(星谷亜紀)



平成19年10月21日(日)第54回沼津牧水祭・碑前祭での表彰式

第十二回若山牧水賞に香川ヒサ氏の歌集『perspective(パースペクティブ)』

平成十九年度の第十二回若山牧水賞は、香川ヒサ氏の『perspective(パースペクティブ)』(終書房)に決った。授賞式は二月六日(水)宮崎市のワールドコンベンションセンター「サミット」で行われ、選考委員の一人である岡野弘彦氏の「日向神話と若き牧水」と題した講演が行われた。翌七日(木)は、香川ヒサ氏の受賞記念講演「牧水と夕暮」が延岡市野口記念館であった。本会からは林茂樹理事長と会員の大澤敏夫氏が出席した。

香川ヒサ氏は、昭和二十二年横浜市に生まれ、お茶の水女子大学文学部国文科を卒業。大阪府豊中市在住。大学での専攻は浄瑠璃。三十代で本格的に短歌を始め、五十九年に短歌結社「好日」に入会。同人誌「鱧と水仙」の事務局を務める。六十三年に第三十四回角川短歌賞、平成五年第二歌集『マテシス』で第三回河野愛



写真提供 宮崎日日新聞社

子賞受賞。歌集に『テクネー』『ファブリカ』『パン』『モウド』と『香川ヒサ作品集』(第一歌集から第五歌集を収録)、評論集に『アナリシス』がある。

受賞作は第六歌集で、平成十五年から十九年までに作った三百三十五首を収録。

選考委員の岡野弘彦氏は「異色な歌集を選んだと言っている。本来短歌は叙情詩としての表現であるが、叙情を見捨てた形で短歌を作ろうとしている」。佐佐木幸綱氏は「歌人は一般的に日本語の柔らかい美しさを表現するが、受賞作は日本語の持つ硬い響き、硬質な美しさを表現している」。馬場あき子氏は「香川さんは廃墟や歴史の跡など、終わってしまったものを横縦に時間をクロスさせながら、存在できなくなつたものを情念や意志で現代に存在させられるかどうかを試み、それを哀惜していると思う」。伊藤一彦氏は、「ヨーロッパ北部を舞台にした歌に硬質なイメージが漂っている。国境を越え、時代を超えて古里が自分を育ててくれているという感覚の一方で、古里に対するアンビバレンス(二律背反)の感情もある」と、それぞれ講評をしている。

受賞に際して作者が自選した作品から十四首を紹介する。

堤防の海に突き出た先端に灯台が在りただそれとして

太陽の黒点大きくなつてゐる私が視線はづした先で

明け方の空にひとすぢ暗紅色 日は人のため上るにあらず

北海に油田発見なかつたらなかつたビル群北海に向く

ダブリンにジェイムス・ジョイス像立てりジョイスの帰らなかつた街に

世界言語交換し合ふ人類の白き歯見ゆるエアターミナル

刺すやうな光いきなり射るやうな光となりて河口に出でつ

この谷の彼方に見ゆる雲と空全部ナショナルトラストのもの

西空の雲間ゆ差せる入りつ日に照らし出されるものの西側

この街の夕日は海に沈むから取り残されてこの街がある

万人は神に愛され移民らは決して同化することはない

死者の名を刻み墓石は無防備に曝してをりぬ情報社会に

この街の今日のできごといくつもの水溜まりとなり空を映すも

カーテンを開ければ朝の空が見え私はここに今来たばかり